

定年俳句誌

3 2012年
月 号

かたね

ふ



黒羽集

(二二)

佐藤喜仙

武蔵野や秋日威を張る寺の庭

本堂の風鐸古び鶉鳴けり

萱葺の堂に扁額冬夕焼

光澄む楓のほつえ薄紅葉



野火止の塚は傾ぎて初時雨

業平の露の古塚胸穿つ

落葉の百木黙して背筋伸び

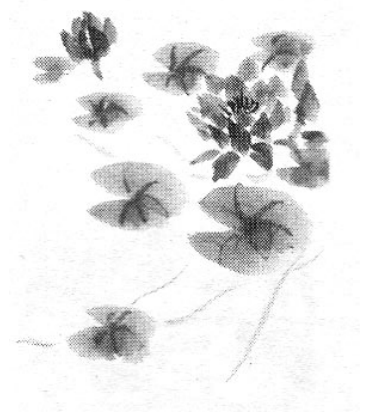
大櫂冬の微光に身を統ふる

風の隙間ずすこひと叢ほつれなし

昨夜の雨杜に武蔵野の匂ひ立つ

かせね集

白選句集



子の肩幅

松本周二

喰積の栗きんとんめ明るさよ

七草の名を諳んじて粥を食ぶ

木々の根の階を踏み初詣

お降りや雲間に空の暖かき

元旦や遠き知己ほど思はるる

楫や子の肩幅の広くなり

初日

川井素山

福寿草

安藤虎醉

火酒重ね憂さはらひけり冬の月

冬瀧に身を浄めたる荒法師

冬晴れの下町巡り江戸切子

金色に細波染めて初日の出

クリスマス家常茶飯の独居かな

富士の山白無垢姿初景色

菰巻きや二人で締むる塩辛声

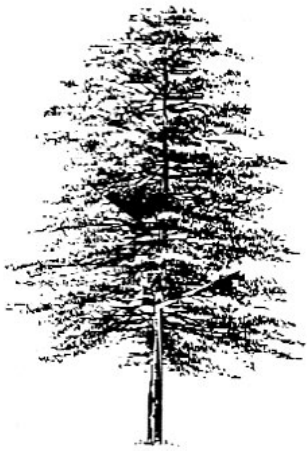
世界一のスカイツリーや初景色

煙立つ苅田に餌はむ鷺一羽

年始め地球の未来憂ひつつ

針の穴スツト通して冬の夜

福寿草肩寄せあつて咲きにけり



撫子集

主宰選



万両を添へて仕上ぐる床の花

本郷宗祥

冬の月肩をすぼめて急ぎ足

厳寒にサッカー仲間集ひけり

江戸風は鴨と小松菜雑煮椀

猫かじる玄関に置きし葉牡丹を

瀬祭のごとくアメ横年暮るる

小池清司

お湯割りを両掌で包み冬籠

東雲に今年占ふ初景色

筆浸す硯の海の淑気かな

粥腹が習ひとなりて寒に入る

初恵比寿全力疾走福男

岡野安雅

除夜詣神戸港より霧笛聞く

初詣氏子携ふ奉納酒

断捨離をなし終え確かと越年す

元旦の救急当番忙しく

冬晴や関東平野の日の匂ひ

小林美登里

冬麗や車窓のぞきて雪の嶺々

枯菊の焚きて煙の薄きかな

夕されば母子急がす雪しまき

小六月寺のいらかの光けり

白山茶花はや目の前に咲き誇る

田島昭久

底冷えの野に咲く梅のひと本ぞ

成人の日晴着気にする娘かな

寒晴れや行き交ふジョガー手で挨拶

木瓜の花咲きて梅林静かなり

那須野集

主宰選



大晦日ただ黙々と蕎麦を打つ

青木英林

冬ごもり煙草をやめて久しかり

吉田啓悟

ボロ市に福寿草あり買ひ求む

小寒や遥かな友に特上酒

寄席通ひ名人芸に初笑

初詣二人となりぬことしから

丑三つのしじまの空や冬の星

石路の花雨脚柔く芭蕉句碑

日脚伸ぶ公園に子等の声弾む

すれちがふ列車待つ駅冬田道

連なりし名山隠す雪催

米田文彦

年越しの美酒の香残る朝の水

丸山酔宵子

朝焼や雪道を行く豆腐売

雲の間の初日仰いで四股を踏む

過疎の地にいはれの碑あり冬北斗

ひ孫来て卒寿の母と除夜の鐘

武田菱の旗折れし野や寒夕焼

呑み過ぎの元旦酒に地震がきて

居酒屋の美しき器や初句会

冬麗やペダルも弾む石畳み

山見つつぬるきに浸る初湯かな

柳田皓一

初日の出スカイツリーにまづ届く

後藤克彦

元旦や国旗の白地眩しかり

黄みばしる西の満月冬の朝

この齢に先輩よりの賀状来たる

元日も公孫樹に群れる雀たち

羽子板の押絵は売れず世相かな
賀状書く絆を胸に筆走る

幸祈る新たな年の初日の出

風邪孫の手に持つ破魔矢初詣

寒九てふひと日限りの水賜ふ

松本信子

冬の鹿尻の白きがはねて行く

郡山真帆

水を噴く鶴の羽より垂れ氷柱

自在には湯の滾る音雪深し

枯蠅螂一步一步が生きる術

寒中の孤松の庭の青きかな

竹馬や子供はゲームばかりして
落葉踏み名もなき池の青きかな

城門の跡の桜の紅葉かな

冬晴れやひつそりとして花八手

地震ありき復興期せむ北の春

長島清山

冬の潮風躍らせて攻め来たる

金田和代

老いてなほ我が師の笑顔新年会

寒雀鳴きて暮にし町静

逆光に光るものあり冬景色

初場所や白人力士眉りりし

闇汗や句座は競争相手のみ
体の芯貫き過ぐる隙間風

枯芙蓉活けて茶室の静寂かな

伝言板

1 第三回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2012年3月9日(金)

14:00～17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」
3階会議室(別添地図参照)

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

2 第四回本部句会

①日時 2012年4月13日(金)

14:00～17:00

その他事項は第三回と同じ

3 吟行(2012年度吟行方針)

毎月同じ場所を吟行し、日本の四季の微妙な変化を認識する。なお今年度は吟行後の句会は行わない。

①第三回吟行(原則第四火曜日)

日時 2012年3月27日(火)

13:30～15:30位

②第四回吟行

日時 2012年4月24日(火)

13:30～15:30位

その他事項は第三回と同じ

場所 新宿御苑

集合 新宿御苑正門前

入場料 各自負担 200円



4 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」

欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付

見本誌 四百円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-7-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II

俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切

奈良七重七堂伽藍八重桜

芭蕉

三段切でも可

初蝶来何色と問ふ黄と答ふ

虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。